

第 22 回 これからの学術情報システム構築検討委員会 議事要旨

1. 日時：2018 年 10 月 15 日（月）9：30～12：00

2. 場所：学術総合センター 19 階 1901-1902 会議室

3. 出席者：

（委員）

小山 憲司	中央大学 文学部 教授
相原 雪乃	北海道大学附属図書館 事務部長
佐藤 初美	東北大学附属図書館 情報管理課長
米澤 誠	京都大学附属図書館 事務部長
栗谷 禎子	公立はこだて未来大学情報ライブラリー
原 修	立教大学図書館 利用支援課 課長
飯野 勝則	佛教大学図書館 専門員
近藤 茂生	立命館大学図書館 学術情報部 次長
大向 一輝	国立情報学研究所 コンテンツ科学系 准教授
小野 亘	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課長
吉田 幸苗	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 副課長

（欠席）

呑海 沙織	筑波大学 図書館情報メディア系 教授
佐藤 義則	東北学院大学 文学部 教授

（陪席）

江川 和子	国立情報学研究所 学術基盤推進部 次長
古橋 英枝	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係員(CiNii/KAKEN 担当)

（事務局）

片岡 真	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係長(CiNii/KAKEN 担当)
上野 友稔	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係長(CAT/ILL 担当)
三村 千明	国立情報学研究所 学術基盤推進部 学術コンテンツ課 学術コンテンツ整備チーム係員(CAT/ILL 担当)

<配布資料>

委員名簿

1. 第 21 回これからの学術情報システム構築検討委員会議事要旨

- 2-1. 「これからの学術情報システムの在り方について」の改訂について
- 2-2. 「これからの学術情報システムの在り方について」改訂（案）
- 3-1. 「NACSIS-CAT/ILLの軽量化・合理化について（最終まとめ）」および「2020年以降の目録所在情報システム（CAT2020）テスト運用について」について
- 3-2. NACSIS-CAT/ILLの軽量化・合理化について（最終まとめ）
- 3-3. 2020年以降の目録所在情報システム（CAT2020）のテスト運用について
4. 電子リソースデータ共有作業部会活動報告
5. NACSIS-CAT検討作業部会活動報告
6. 第20回図書館総合展について

<参考資料>

1. 統合的発見環境実現のための基盤構築（たたき台）
2. 今後目指すべき学術情報基盤の在り方補足
3. 2020年目録所在情報サービス（NACSIS-CAT/ILL）再考のための提議
4. CAT2020クライアント作成のための技術資料

4. 議事：

議事に先立ち、事務局より、三角委員が9月末日をもって委員とNACSIS-CAT検討作業部会主査を退任されたことと、9/27付のメール審議において、「これからの学術情報システム構築検討委員会規程」に基づき、後任主査として佐藤初美委員を選出した旨の報告があった。

(1) 前回（第21回）委員会の議事要旨確認

メール審議を経て9/18付で確定したため、委員会内での確認は割愛した。

(2) 「これからの学術情報システムの在り方について」改訂について（審議）

事務局より、資料2-1～2-2について説明があった。審議の結果、文書の方針については合意が得られた。詳細については、委員長と事務局が今回の議論を反映した改訂案を作成し、メール審議を実施することとなった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

[本文書が目指す方向性について]

- 「統合的発見環境」という用語は、現在公開されている「これからの学術情報システムの在り方について」（2015年5月29日公開）から使用しているが、特に「発見」という部分について、改めて目指している方向を確認したい。例えば、今まで検索できなかった情報が検索できるようになるという意味なのか、それとも、検索時点では意図していなかった情報を偶然見つけられるといった意味なのか。前者は系統的に解決できるが、後者は難しいのではないか。
 - 日本語ではどちらも「発見」だが、英語で表現するなら前者は「discoverability」、

後者は「serendipity」と言い換えられると思う。

- 現場の図書館員にとっては、電子情報資源と印刷体を「統合」することによって「discoverability」の向上を実現する、という方が理解しやすいのではないか。
- 「統合的発見環境」とは、国レベル・世界レベルで実現していくものだと考えている。各図書館レベルにとどまらないよう、表現に留意する必要がある。
- どちらということではなく、「discoverability」の実現を前提に「serendipity」まで視野に入れたうえで、そのための基盤システムをどのように準備すべきか、という議論だと考えている。

[当面の課題と検討体制について]

- 「4. 当面の課題」について、実際にどのような作業部会を作り、いつまでに何をするのかが具体的でない、作業部会委員が募集できないのではないか。
 - 第20回委員会では、現在のNACSIS-CAT検討作業部会の後継部会の課題として「RDA・新NCR対応」が挙げられていたが、「4. 当面の課題」に書かれていないのはなぜか。
 - ◇ 「4. 当面の課題」の(1)「統合的発見環境」や「統合的運用」を可能にする新たなネットワークシステムのモデル構築に該当する検討組織が、タスクの洗い出しとその優先順位を設定していくことになると考えていた。その中で「RDA・新NCR対応」のようなメタデータの高度化も検討することを想定している。新たなシステムの形が定まらない中で、メタデータの高度化のみを単体で議論していくのは難しいと考えている。
 - 「4. 当面の課題」に「他機関との連携の検討」に相当する項目を追加した方がよいのではないか。NDL等との連携についても、進めなければならない場面がある。
 - ◇ 現在の「在り方」では、「4. 当面の課題」に対応する作業部会を設置した。他機関との連携は不可欠だが、作業部会の設置につながるかといった観点から「4. 当面の課題」に記載するか改めて検討した方がよいのではないか。
 - 第20回委員会で、2022年のNACSIS-CAT/ILLのシステム更新が、次の大きな変更の機会だという話題があった。ワークフローの改善等の大きな課題が含まれていることを考えると、検討時間が短いのではないか。
 - ◇ 2022年の時点では、システム更新によってNACSIS-CAT/ILLを拡張性のあるシステムに変更しておき、いくつかの先行機関が拡張機能を利用して運用を開始する、といった状況を想定している。
 - ◇ 作業部会の設置において、5～10年は検討期間として長い。2～3年程度の目標を設定する必要がある。
 - 改訂版を読む人のためにも、今後設置される作業部会委員の募集のためにも、本文書の公開時点では作業部会の具体的なタスクも明確化しておく必要がある。

[持続可能な運用体制の構築について]

- 「新たなネットワークシステム」というのはローカルシステムも含んだ言葉だと思う。

電子情報資源をどのように新たなワークフローに組み込んでいくのか、一方でどのように従来のワークフローを見直していくのか、といった検討が必要である。例えば電子ブックの組織化について、どこの図書館でも適切な方法を定められておらず、作業部会のひとつのタスクになると考えている。一方で、特に希少な資料や外国語資料等、印刷体の目録もまだまだ現場では重要であり、業務量も軽減されない。ILLや訪問利用も多いことに鑑み、これらの貢献を評価するような仕組みも必要である。ワークフローの見直しの一環として検討していただきたい。

- 例えば、書誌作成をしないという参加方法を新たに選択肢として設け、書誌作成機関はその作業自体でコストを負担している、という考え方を前提に、作成しない機関から利用料等を集める、といったイメージか。
 - 有料化に関する議論はこれまでも度々あった。JUSTICEやJPCOAR等、受益者負担を前提とする枠組みもすでいくつかあるため、改めて検討してもよいタイミングではないか。
- 現在のNACSIS-CATは、共同分担目録方式を採用することによって、全国規模の総合目録を構築する、という参加館全体での共通理念があり、それを前提とした連携・協力があつた。今後、享受するサービスや負担方法に選択肢ができるとするならば、これまでのような連携・協力が維持できるのか懸念がある。理念と実態に乖離が生まれないように、「3. 進むべき方向性」に示されているような内容に限定せずに、方向性自体を検討する、といった書き方がよいのではないか。
 - 表現について検討したい。

[学術情報資源の確保について]

- 「3. 進むべき方向性」の(5)に「過去の資料の電子化を推進」とあるが、これまで本委員会としてはデジタルアーカイブのような過去の資料の電子化そのものは扱っていない。今後も本委員会のタスクとして残すべきか確認したい。
 - 「統合的発見環境」は「最終的に必要とする学術情報にアクセスできる」ことを目標としている。JUSTICEやJPCOARの範囲外の部分について、本委員会のタスクにしておくことは必要だと考えている。指摘のとおりこれまで議論ができていないが、引き続き「3. 進むべき方向性」として残しておきたい。

[用語について]

- なるべく専門用語を使わずに、平易であつた方がよいと思う。解説が必要になるような言葉を用いる必要はないのではないか。
- 「ローカル」の対比が「中央」であることに違和感を覚える。「グローバル」「ナショナル」といった用語への変更を検討していただきたい。
 - 「中央システム」はそのままにして、「ローカルシステム」という表現を変更してはどうか。各機関におけるNACSIS-CATに対応するシステムだけでなく、電子情報資源を扱うシステムや、機関リポジトリ、リンクリゾルバ、ディスカバリーサービス等も含めて「図書館システム」と言い換え、本文中で用語が指す範囲を具体的に示すのはどうか。

- 「コミュニティ」や「ワークフロー」等の一般的に使う言葉や、本文中には登場しない「ワークフローシステム」は用語集に記載しない方が分かりやすいのではないかと。

(3) 「NACSIS-CAT/ILLの軽量化・合理化について(最終まとめ)」および「2020年以降の目録所在情報システム(CAT2020)テスト運用について」について(審議)

事務局より、資料3-1～3-3について説明があった。審議の結果、資料3-3の内容については記載の内容で進めることとし、資料3-2については事務局と作業部会で議論の内容を反映し、順次公開・通知することとなった。

質疑・意見交換は次のとおりである。

[資料3-2について]

- Iは「である」調、IIは「ですます」調と表記が揃っていない。「目録情報の基準」は「である」調で記載されているため、そちらに統一してはどうか。
 - そのように修正する。
- 「4.4 修正をせずに書誌を新規登録する場合の注意点」～「4.6 例外規定」は、現行の目録情報の基準から変更がないため、記載する必要はないのではないかと。
 - この文書を「2020年以降の目録所在情報システム(CAT2020)の運用における新基準」として作成したときの名残ではないかと。現在は変更点のみ書くという方針であるので、書かなくても問題はないと思う。作業部会で再度検討し、判断してほしい。
- 「9.3 概要」の文言はメール審議の意見を受けて修正したものだが、問題ないかと。
 - 資料3-2のとおりの記事で問題ない。
- CAT2020移行日について、テスト運用のフィードバック対応にかかる期間や、年度の切り替えと重なることも含めて、改めて日程を検討する必要がある。「目録情報の基準」や「コーディングマニュアル」の改訂を予定している2019年第2四半期までには移行日を確定することとし、現段階では、具体的な日付の記載は避けたい。
 - 日付の確定時期について「最終まとめ」及び通知文書でも言及することを前提に、現段階では日付を入れなくてよいと思う。具体的な記述文言は作業部会と事務局に任せたい。

[資料3-3について]

- CAT2020に関して、図書館システムベンダーへの情報開示はどういった状況か。
 - 昨年度2月にベンダーへの説明会を実施したが、それ以降のすり合わせが必要になってきている。現在は参考資料4「CAT2020クライアント作成のための技術資料」をドラフトという形で提供するための準備をしている。ベンダーからのフィードバックを受け、修正後に正式公開する予定でいる。

(4) 電子リソースデータ共有作業部会の活動について(報告)

飯野電子リソースデータ共有作業部会主査より、資料4に基づいて報告があった。

(5) NACSIS-CAT 検討作業部会の活動について (報告)

佐藤初美 NACSIS-CAT 検討作業部会主査より、資料 5 に基づいて報告があった。

(6) 第 20 回図書館総合展について (報告)

事務局より資料 6 に基づいて報告があった。

以上